

国指定重要無形民俗文化財「聖霊会の舞楽」（天王寺舞楽）

「聖霊会は聖徳太子の御忌にその聖霊をまつる法会で、4月22日天王寺区の四天王寺で執行される。この法会は王朝時代の舞楽法要の姿を伝えているもので、古式豊かな舞楽が六時堂前の石舞台上で四隅に巨大な赤紙花の曼珠沙華を飾って舞われる。総礼伽陀、四箇法会儀式に織り交じりながら、「振鉾」「蘇利古」「菩薩」「獅子」「迦陵頻」「胡蝶」などの舞楽が舞われる。

四天王寺は、三方楽所の一つに数えられてきた由緒ある舞楽の伝承を持っており、明治初年に楽所を一つにして宮内庁楽部にした後も、その伝統を伝え残して現在に至っている。」（文化庁ホームページ：国指定文化財等データベースより）。

文化財「聖霊会の舞楽」の文化庁指定保存団体が天王寺舞楽協会である。本日は天王寺舞楽協会より依頼を受けて「天王寺楽所雅亮会（以和貴会）」が演奏する。

演奏：「天王寺楽所雅亮会（以和貴会）」プロフィール

「天王寺楽所」は、京都・奈良とともに、古代にさかのぼる長い伝統を有している。明治維新の際に楽家の楽師たちが東京へ召される事態となり、天王寺舞楽の伝統が危うく途絶えかけたものの、これを憂いた有志が「聖霊会」保存グループとして明治17年に「雅亮会」を結成した。明治23年には初代会長小野樟蔭のもと、会則を整えて事務所を浄土真宗本願寺派願泉寺に設置して天王寺舞楽の伝承団体として地盤を確固たるものとした。それ以来、民間雅楽演奏団体として、今日まで天王寺舞楽の伝承・研鑽を続けてきた。天王寺舞楽は、仏教法会における雅楽・舞楽として伝承されてきたもので、4月22日の四天王寺の聖霊会舞楽大法要は、古代の仏教法要の盛儀を伝えるものとして国の重要無形民俗文化財の指定を受けており、大らかで力強い舞態を特徴とする。

四天王寺における篝の舞楽（8月4日）や経供養舞楽法要（10月22日）、住吉大社での卯之葉神事、観月祭の舞楽に参仕。その他広範囲にわたる国内各地の依頼公演をこなす。津村別院の報恩講の奏楽も毎年雅亮会が担当している。

一年に一回大阪フェスティバルホール等での自主公演会を催し、6月には津村別院をお借りして毎年雅楽ゼミナールを開催。

海外公演としては、昭和53年のアメリカ・カーネギーホール公演を皮切りに、ヨーロッパ各国、ニュージーランド、韓国、中国、チェコ（大統領臨席）など豊富な経験を持つ。

大阪府芸術祭賞、大阪府民劇場賞、大阪文化賞、大阪府知事表彰など、数多くの受賞歴を持つ。また、初代会長小野樟蔭は上方芸能人顕彰を受け、楽頭であった小野功龍は平成26年に日本芸術院賞・恩賜賞を受賞している。

演奏曲目解説

舞楽 蘭陵王（らんりょうおう）

あまりにも眉目秀麗であったがため、戦いのぞんで敵を畏怖させることができず、つねに金色の恐ろしい形相の仮面を着けて戦場に赴いたという古代中国北齊の王蘭陵王長恭の伝説に基づいてつくられたのがこの舞であるといわれていますが、一方この舞曲が天平年間に、今のヴェトナムの一地方にあたる林邑国の僧仏哲によってわが国に伝えられた林邑楽中の一曲でもあることから、七世紀頃東南アジアに盛行していたインド神話に基づく「竜王の喜び」という仏教歌劇の主演である竜王の姿がこの舞の起源であるともいわれています。

先ず舞に先立って横笛の主管と太鼓、鉦鼓の奏者によって小乱声が奏されます。これは舞の前奏曲ともいうべきものです。

次に鞆鼓、太鼓、鉦鼓の奏者による単純な四拍のリズムを反復する乱序に入りますと、毛縁りの裱襠装束に金色の仮面を着け、手に金色の桴を持った舞人が登場し、「出る手」を舞って舞台中央に立ちます。

続いて、軽快で民謡的な旋律の当曲に入りますと、舞人は舞台を縦横に動きながら勇壮な舞ぶりを繰り広げます。最後は「安摩乱声」が奏される中「入手」を舞い堂々と退出して行きます。

舞楽 登天楽（とうてんらく）

この曲の由来については定かではありませんが、一説には天を目指して昇って行く龍の姿を象った舞であるといわれています。朝鮮半島伝来の舞楽の様式である右方高麗楽に属しますが、この様式を借りてわが国で創作された舞であるとも言われています。

先ず箏、高麗笛の主奏者による序吹き（じょぶき）に次いで拍節的な楽曲に入ると、卷纓冠（けんえいのかんむり）に黄色地の袍（ほう）を着けた蛮絵装束（ばんえしょうぞく）の四人の舞人が舞台上に現れ、順次出手（ずりて）を舞って所定の舞座につきます。舞が始まると、手首を回転させる「ギロリ」や、腕を回転させる「フリガイナ」と称する舞の振りが繁く繰り返され、この舞の動きを特徴づけています。優雅な中にも軽快さを感じさせる舞といえましょう。

舞楽 還城楽（げんじょうらく）

「見蛇楽」という異名を持ち、蛇を食する習慣の胡人が蛇を取って喜悅する様を舞に象ったものともいわれています。舞態や舞の振りに具象的な動作の少ない舞楽にあつて、この舞はいささかの物語性を持ち、舞振りにも蛇の捕獲の所作や喜悅の様を具体的に表現すると思われるものが見受けられます。

先ず「陵王乱序（りょうおうらんじょ）」という楽曲が奏される間にグロテスクな風貌の仮面をつけた一人の舞人が登場し、途中にとぐろを巻いた作り物の蛇が舞台中央に運ばれますと、舞人は蛇の周囲を旋回しながらこれを捕らえようとする所作を繰り返し、最後についに蛇を掴み取ります。次いで当曲が演奏されますと、舞人は蛇を振り回しながら喜悅の態で激しく舞い、最後は交錯したような笛の演奏による「案摩乱声（あまらんじょう）」の奏楽の中、蛇を捧げて意気揚々と退出して行きます。なお、当曲は、天王寺楽人が発明したといわれる夜多羅拍子（2拍＋3拍の複合拍子）によって演奏されます。